貞操 松の花

美談

十一

208
15
696

国立国会図書館　　松の花 5編 208-696

ガラス使用

貞操
美談
松の花
四編
中

208
15
696

国立国会図書館　　松の花 5編 208-696

ガラス使用

貞操美談 美登利廼春第二編巻之中

東都 松亭金水編次

第廿回

慶山ふて八月下旬人皇朝ふてハ縒ぶの神とて何時の世よりか俗伝ふ年々九月晦の夜諸国の神々出雲なる大社へ集会給ひ十月の晦まで二十日がその間世界の男女の縁をぞ結びあふとのひ慣れに十月をりん神無月とし。既ふ俳諧の季寄ふも神送などの名あり。故ふ出雲の国ふてハ神在月と唱ふ添

すといふ。云ハ伝へども其証なく。全く俗の淫言なるらん。殊に十
月をもて神無月といふハ是等のことにかゝはらで陽の極月なる
ゆゑ。陽無月といふ説あり。また無上月なりともいひてその説く
由定かならねど。神々出雲へ行玉ふべき外の事にて神無月と唱ふる
よしハいと拙なし。俗間話ハ且く措きて爰に縁談座丈人丈婦ハ端く
縁喜屋伴ゆきて伝七が田舎の話。逸く具に告げたれバ。万吉の
丈婦ハ大に歓び。速に乳母なるお勝とよび。北叟笑のよろこび
合せ。お雛が病ひ本復次第。結納もうけ婿様の。日取も

概し定むべし。さればこそ今此方お雛に縁を。何時も早く全快の
歓びを待ありし時なれバ。お勝も俱に歓び頓てお雛に其由を
いはんお雛ハ異のうちにはまた変せぬ一心地もて嬉しくおもへバ恥し
くまた父母の許までも拙なれこの事を慰しとぞ。すべて人と
今までの身ぞにも空怖らしく。何しいふべき詞もなく。嬉しい
ふつけ先へ立ハ。女子の情として涙ぐむ。眼をお拭ひ手を合せん。
う拝こつ歓ぶめり。かくて九七日経るほどに。お雛ハ病床
なりしとぞ。湯浴髪あげさるれども。頬らべとりひて結納も

かの丈助が計らひにて。立派に仕立贈りを誂せしにぞ千穐万歳と。寿ぐ家内の賑ひは病気のうちの慰みなる。然さの根に引更ていと目覚しくもみえたり。実に小糸は其の程より引続ける種々の煩襟より病ひとなりぬ。子舎に引籠み臥て居る。その且暮にもお雛が伝実。その身も病ひに在ながら薬を勧め食物まで。ことこまかに侍女へ指揮するも忠心なり。小糸を嫌くかの人もあれど。主の分付いさゝかも乖くべきにあらざれば。指揮のごとく扱ふれども。小糸は平生にお雛が恩義をいと有がたく心に深く。是に嬉しく思ふ折からに近く塔の来ることゝ。家内の歓びさゞめく声などの。耳につけても寝くはあられど。まで再び起るともなし。まづ一旦は出勤して。日来の恩義に報いんと思ひながらも。駒様へあるひは頭痛眩暈ありて。いと苦しみなりがたし。勤めも発せぬより揚て湯薬治ひ療ぐなりし披露し子舎に出お雛が子舎へ到りての程より。看ぎ病気の旦暮に一言あらず恩になりし。有がたきよしを述さて老女環にもこの所労も怠なく。兼ての婚姻近くに仕婿

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

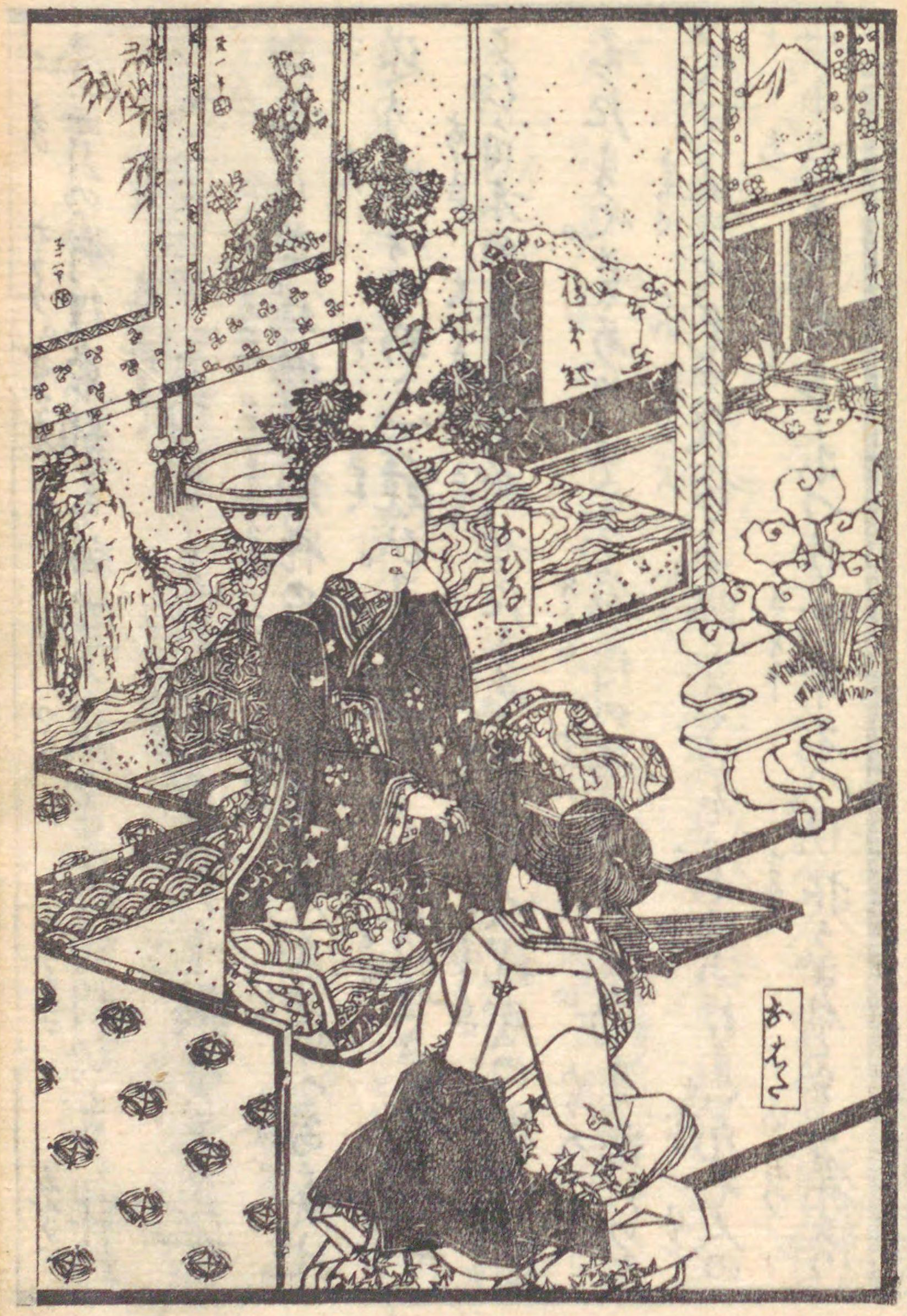
きみの御入と申す。さぞお歎びでござりませう。私までも倶々に。
誠に嬉しく存ます。歓びいたしまして被欽顔も被に老さへて
噺小栗様方の定めて少なくありますまい。恥かしいながら不思
おつきが病気となつて、長い月日を入れました。若い病どのの
時節が来て、お思ひの外に両親の思ひつきもよく、何の〳〵むつ
また液で容体が頼ひます、恨み申すに案じ、先頃附しに
其方の身の上義理ある男のその為に、非道して苦労をする
と云ふぞ此方の心に引かるべく、さぞさうと察しられまする。ありし

何ぞの時節が来るまで、さうやおふみうちに、などと今度の
ことなど発明者で其方の孫まの気を揉んで時節を待つて居る
がよいといふものにて、小栗の者は相せ。其と頓て明らめ
て居ますけれども、元来の浅からぬ縁しのおつけ哀しいに付て
我がいふその事ばかり、御主人さまの御奉懐としやしませう家
来の私までも似よつてするで、人前ともぞ、苦労といたしやす
の御果なる御縁でござりません。ゆくゆく今後が果ぬ笑ひになる
ものを。お雛が今田来の思ひ、恨み、ふと云うも少さん不美

ぬるこのオのて人何処に何旅して居るしりふるのさへ互に忘る
ぬオは便りをすべき宛もなく彼方にもまた其の人の更に継
今月日の経ちしかんや家は忘れはせじと云へ
ど由移り易きは人心殊に子のオこれ母の為に勧むるも由られ
し其の腹立にモシ万一坊主が憎けりや袈裟までも憎いと
やらの喩への如く今は妹さへ在るかよし其とても縁尽て面
を合はしたらば七重八重に由のひ解て一重に化ることもあらん
を其のまゝ竟に逢はざれば母と倶なる不実とや思はれて打

果んと云し果敢なくも種々にのひまはせぞ気も継ぎしと人
並くに立つ居つ働くべくも思ひ子ど。お離が恩義と実に更に
思ひかへせば是もまた世に有ることとあれ己が勝手の思ひづる
に幸兼累にすべきかと自ら心を励まして病ひを押して
今日と思明日としてくらしん又六日過ぬれどに未だ隠月の末
に自ら是ぞ今日こそは諸に良辰吉日なりとそれより播入
と極まりて朝まだきより座敷の掃除疎遠ひ棚の際を
子。女の身にて物に心済なる人来るべきぞとなれよく混雑ず庵の方より

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用



国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

今霄の料理魚類青物草く。積かさ子て切刻む。まな爼板
うちへ出入の御用達びにとく拵觳。あるひハ干鯛熨斗昆布。
鰹節白髪鯣物摘綿鴨の番ひ相生の寿き祝ふ為蓬莱。
造り物まで巧みに競ひ。つまらじと見世されより。最
こむ白木の台三方。所せきまで色よく祝義の調度畳
なるまでさだめたる家内の賑ひ。万端の支度いそ
くと主出て見が挨拶に暇なくこそつかえにけり。凡そ人の
世に在るや。吉事につけ凶事につけ。招かざれども人集まり

所謂奥に蝟集しやうん。吉凶にも既につめまど。是人情
の弱く所張ち調ふの心なれも。世に立交る人の人にハまさ
や止がたき故。行べし。只義理ある親戚朋友疎遠
めも。況や他人に於てをや。ことにその貧を悪むにあらねど。自
らあの勢ひあんまで止ことを得ざるなるべし。然ばこそ心あらん
人が人訪ひ来るとも悦ぶべからん。まさ訪ざるとも恨むべからん。
こゝ天然に任せんのミ。形てお雛が子舎のこゝかしこ入勝ほ象を
初めとして多くの侍女さだめたる。まづお雛の化粧さして頓て

各々に替衣をもひ。部屋に入りて髪をゆひ。鉄漿つける者もあり
今日を晴と元縁てしも。綿へ持てる櫛笄をいと的歴に際り
或ハ衣裳を改めんと。使ひに立しその人の帰り遅しとまち
かねて一人ちまるもいとやすらかき女子の癖としてつがと猶へ塔の
来るを待に紛ひ降りてひけらかすもいとしく鳥滸の所為なる
なす急ぐまる間に名の日の彩さへいとゞさりがたく。衣や落
著にありけれバ今へお出に襷もなるまへ。芳が嬉さん召更
をおきりましとて立かる前に浅におお離をさりまし渡けの

白綾に袖。おそろしきなる襟に。あり振袖も奥床しく家の風の
絵帽子ハ。折の鬘ハ丈なくも。白ひこ紅白椿の花の姿の
艶らしく。かくて時斗もキリくと。報つきて告る酉の刻。金蝋燭
燭晶くと。そえ列ねるその行装に余所ハもつるども美しき
花嫁ぶりの景勢なり。折から結構を丈助。丈帰ハ。主
由晴着の鮮明なる。打扮に佐七の案内して。徐々と入来る。
執次人ハ。立出て。まづ佐七をバ一間なる。裡へ伴ひ。休
息させ。葛湯菓子など勧むるに丈助丈帰ハ方を案つ

国立国会図書館　松の花 5編 208-696
ガラス使用

お鳥。まづお雛にも対面して。今宵の祝義なンどを述べん
お準備が足しくハ千代の堅め式三三九度。お盛をと促がせば。
主人その準備も整ひたりとて。設けの調度をまへに頓
を乱さで座を置たる。然へしてお雛は侍女に。手をとられつゝ
座に居なおれバ。佐七ハお様が先立出て。むかひ合て座す時に。
お定まりある肴の吸物膳をおし居る。其時下女お様ハ進て
よ宜。不束なれど媒妁役吉例に任して三ッ組の上の盃
お雛にさゝせ。長柄加への銚に指揮をなして冷酒を注ん

抑今日の長柄の役は別人ならぬ小糸なり今しも此処へ
運入ければ。繁蔵とこれる婿君を。除ふ方なる死佐七なれ
ば。心裡に怕として悩ハし斗を長柄さへ藤さんして気を
沈め。何さま仔細のあるをならん。と佛なくやのりゝべき。
と憶へて面をぞ見けれ共。思ひまハせバ情なや。深くも契り
言葉をも。忘まじて今宵の婚りを見届しこの身を突すた
めとも思ひ差ひて斜るにや。その故よへ計らまねど。その
人故にこの月日。憂苦労して憶らひも。親く私をあはせたるぞ。

物いふも身の稼業の妨げあるとも思ひまさや。夏まれあらねば愛
なるゝは早くも覚えよとぞうりに思ひ迫りて名声もらし落る涙
を人やうるゝ。人べきてその数々を云ふ胸の晴なんが。然る仇
あた争動きていよ〳〵深まれ捨らまてい。ともまでなく赤心
の子に仇るゝやうん悔しと。鬼さ身のさる胸一ッに収まり
かゝて歯をくひしばり。嘘は怨襟さの有為転変。依七もあん
座をたて。故柄の酌取が身なども。文字系あり。何様
あて夏にし怕に悍まり。療へ入すまじ今あくては紫あるべき

とかくねば。親にも在ながら其。渠も他に情弟ありて。
その夜家出をなさゝんば。此家に居るべきやうなし。然されば是
に縁故ありなん。さればとても如何なるがあて二の葉は〆
不審と疑がはしく孝ては神にいる猶は其の次身を暁りきて
べきやうもなく。渠の夏に心あるなるがら。愛を含むさなる程。
ぞ一言の物いふなへ。ぞの節といひつゞ心を。図る子にてのなる
べし。若他心ありなば。僥倖なりと思ひて。十分恥を雪ぎて
く腹を立る元然もなかりしが。年限に満よとの催なまど思ひ余

るゝくその拍子る。遊き心ゆりくかゝえんと云ひ廻せバ祝
言の盃さへ日手ふ着バ程なく果まべき由しとて。お雛を
立て子舎へゆく。その身ハ雲晴休息と。元の一間へ帰り来て。
程なぐと云ひたりまへ。此うへぬ行あるまうあらんと妾
さ心ゆかしねかりべし

第六二面

程日あらせバ座敷の什捐。かくさまりて万事の支掃。
その他親類誰彼と。席を列ねて居ならぶ。ま子支小盃

ごとぞ。今すゝ今宵の祝式なるまゝバ。佐七ハ丈助が嫁聟ふ和律
のまた再席ふつた。男を始めそれ〳〵へ初對面の挨拶追頼
て盃をさり替そ。この折お雛ゆ衣裳を着かへ帽子を脱そ
出る。その面かくちの艶羅さへ。この頃美形でうんで時より新
のき艶潤ひありて。殊ふ光りを副る如く。發鮮明ふさら揚
となれ。大夫の菖蒲ふ相あそ。おとさるより程美し。衣裳の
より金ふ飾し。金根をもて繡あり。模様の彩色花華なれバ
質朴なるがまへ見所あり。かゝふ由心を移ずりと。思ふなるり

の粧ひ由て。徐々しく立出ます。お盃は是で夫れが手もどり。此方へ来
ます世と佐七が傍へ居由ます。お雛は何となう心配つしさして控
ゐさ祝由で口を寝ひ。對居るれども盃の次第由すさん吟
いたゞく願ひ逆さずへて巡りで行く。今宵は殊にめでたしと大盃
に波々とうけて飲干は上戸なりました。平盃を辞退して吸物
椀の蓋作向を肴に嘗む下戸もあり。殊に今宵の饗主なるお
雛は元より佐七ともに酒も飲ず人々に今宵を徴して膳部を
もりを饒倖庵へ通じて饗膳をもち出かけて種々支さ人

果て然らは今宵の寿ぎと。浅草なげて一世の四海波静に
て。亜白浦まる時津風相に相生の松でそと。謡ひも上戸の癖なる
べし。依大さしに果しまへ。まづ此二人を休息と。殊的役なるお嫁が
計らひ頼てお雛が今宵の内に設けける純子の蒲団前寄
南の暈なる寝部なる閨へ佐七を伴ひて。まづ禮服を脱せなど
なつ。まさか雛に由て床を為させん。こう人踏ひ誂へし寝衣
番女昆布の取毅。床盃と係りて由り。是は仕舞て丈なか
機は漸くなりつて息を吻き。寝へ後とお体とさせて見と是用う

あとの侍女共。其侍女ハそれ〴〵にいひ捨て元の座敷へ立帰

り。さア是からを此方の騒ぎおあそびて戴かうと。其個ハ元より

あるになりし人も張合ハ彼是と辞退ハ未だ下ど吹かれども。

未だ十分に酔ハぬけれ共お雛ハ是までに積るおもひとうち

つけに云んとしても人に隠されて。不和のきぶんに見えず。打柄

次ある侍女ども。誰もそのお嬢さまが膳立の方の邪戸に当らう。

若く此方へごぜんせと。動也と立てゆく跡ハ。其個の他ハ人

由なし。佐七ハ見て咲きある。厠へ往んとちぢ出れバ。お雛を

扨勝手が知れまいと。案内を吹へ「ヨ」誰ぞそこぬかしといろ案内咲へ

「ハイ〳〵不居ませんと縁へ出かけ小糸へ。お雛ハ其を吹とりて「小糸さ

手水場へお座中て徐くらん「ハイと答へて窓洞を強て佐七

が先にさもうれしそうと廻る廻縁四角「これまあ帯と清き洞

其処へ投出して佐七が袖お携つぼの糸一佐七さんお手ハアア。

ちう息才で居て下さつと。追ひ迫つて宗匠の凍お雛さんの名を借

で上さ文さえ夫ツきり。何う振返る手ぶらはいやす。モウ想ひまする

しん延引ある人の婁しく出かの妻て行くろう一言の返辞

住ハありそうなものし根ゝ変りに待てゐるうち。待まちくたびれて知ら
ぬ人屋けて是さハ幸吉郎のお返辞見えたバ今宵の戌刻を相図に
角まで出てくれと云てあれど。其の手跡が違へバモシ万一ゟ遠でハある
ないかと疑ひながら外へ出ましたが有せいもいせん。吾妹を
抱て迎出ん人アリヨしとまかなく六町許く家を出へおち付て吁が
幸吉郎のお妹ハお花さんの旦那。十次郎さんと久振めく知り
其から後ハ聞振くべ縁な宿の世話になり。其の家へ往て二両
のお備を母の方ゟ限りなくる縁故。まづそのみを幸吉郎へ知ら

せ一まづ安堵させませうと。十次郎さんが其の翌晩幸吉郎の宅の
門まで往き人を恃んで動静をきけバ。今日簡払くで勃発
うけ今宵ハ何処ぞへ行ったもの。知れぬと聞て彼お方も怨しい
方の心入見が郭で讐になつたのと。余方に見てもすんだ。
其から後日縁の郷さんと十次郎さんと或個して幸吉郎の往方
を探せど知れぬ。広いとかでも鎌倉の中なら知れぬなれ
ないが旅立へでも出なすつたら。深く案じてゐる時ハ平生から
小さい気象の方勃発うけて使いかゝ。人に顔を会その面

月なのしき迫つて方法を出しいなさ～攻たと両個連ぶち此く
処へ来て素じるゞの口従と咲きゝ宮術が胸のうちで□くと
将倒きていよく大根しきれるなく繁ふ於でと云つても。イヤまて
子湯妻卯由雄士よりや大根しさるも、なうまい是ハ早まる
許でるいし自己で心をさり出して？に由旦暮気にかゝり。竟
小病の疾しあり。久しく外つて居まされど恩ある主人へ婿さ
まが、お出しと咲てハ済ても尋るまじ。押て四人口髪化粧。お砂に
出まべ忍ひきや。其婿さまが妻卯とハ何根しさるゝと呆れさん

動静でさへ咲といと深縁なりの胸のうち。漸く嬉しく此鷲
と有海く。まず神仏ほ拾らせん。祈して沢とらるれバ。其世の人へ
何根でもよい咲ハ妻卯に末の僅な長の月日で好らつて。めでたく媛
つゝ今宵の祝ひお雛さまのお心と自己の為に由引競べ来来
妻卯と両個が中で知つてなまつてるすでいる。まさ其人をお
主とあつく不相応なる金備て。喜び親の身を限るも会
お主の御君なるまや。まゝく飢にならせう。千代に八千代に小さ
まだの為しするまで配遂て万代さきの先の世ハ添て両個が神

まつの花四中十五

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

うけて結んだ縁しを反古にせん。妻夫となつて下さるべ。依に覗
これどきいませんト周章しくいふうちぐにゝ。人や来んと気を配る依
七い是を聞きて小糸が耳へ口を寄せ佐「聞かさくれん奥方の深
切。今に旅めぬその心。存ぜてあらうと自己が胸よりハ。九分も十分も
冶つて居らず。前髪さまるその時に。母がりハ此方も勘当
あらうかと責重に。沙汰をせるがかくらの処旨。夫を今まで音信
なく。その母が来て難題難云ぞうも実とハ思ふまゝねく。
見棄してへえと。親の異見の耳にありらの頃が様と丈助が。らの

縁組を云し時。おあの子を頭に出し。容子が志しとゐば夫の
と断りをうけたる是もまた。母ろう委細く呼く来て。おあを
的吉利他心で強出したる旅くを多く。執心するといえれてつえを
ばさて積くに気が迷ひ。ついに速に所くし沙汰をそあのハ右
様でもわらうか。霜女根あくれバ此方ゝあり。情を立るハ大きな
白痴と。胸を定めて浪人者ハ。世食色とこの縁組。渡りに船と
家迎で。つんとよろこぶ祝義のお酌ハおあ。是ハ何様ぞと驚いても。夫
といはれぬ満座の中。折も今食せ篤くまると。容子を呼てその

上で。途方ハあると、気強くもまがきの座敷ハ減しても。減ぜざる
八舶のうち。何処ふ居るや逢たいと名へども宅の猪子ハあまりび
顔ぞ不痛める心根が痛ハて丁役人ありまし。その沢ゆて今まで
の紛ひも飄と晴し。夫ふ対くも死んだうやと不便ふおつさず次
第の。身のうへもあまり実意をも吹て見まへ彌あいのおく夫
ハ跡の事。夫ふどすとも不憂苦労させさおめを嫁ふいしても何
根まア〳〵の婿ふ為らまり。知つての通り祝言の盃こそハなくと
けまど枕を一夜もちしきみが。破り椎子さこそのみで見逃。是を速ふ

おめを連て何処へなりとも立退て。ますその上の一名業人の来ぬま
ふ屍引うけ。おおハ大らく案内を知つても扉より庭口でも掃除
口でも人の目ふかゝらぬ所ゟ〳〵サアくト佐七へ手早く締逃次第ハ
携て「ヲヤ怪しからぬ夫てハ恩を仇ゟして。容儀も済次ます第も
また世話をおかつたあへ。何云訳ダいかりませう。夫より矢張
今云た通りおいて下さるを可い「佐「平素おおが徒心とも人の縁
自己もまた。不太分な指でもいたらうとおつてしも手ふこの婚礼
然もまの事ながら義理おくめぞ。不法な奴と爪弾きもされさへ

行厭ひつゝ。サアはやく案内しなと留て止まる辞もあらん空怖しくも
思へども。呼ども斧一つうち解く。是不ど家の中の家を捨て我しきを
旅中にせんじ。いとゞ痛しき身に縁り。嘻や何がなとぞ思ふなりけり。
艶も謝禮も打わりなく頓て西戸を開きて往来の綻び切る。
中晴の真夜中に儀偉に途闇まで濁をゆく

緑廼春第二編巻之中終

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

208
15
696

国立国会図書館　松の花 5編 208-696

ガラス使用

国立国会図書館　　松の花 5編 208-696

ガラス使用